

プロジェクト科目 議事録

2006 年 11 月 14 日提出

プロジェクト科目 テーマ名			
小学生のための能楽入門プログラムの開発と研究			
記録者氏名	E	学生 ID	-
日時	2006 年	11 月	14 日 (火)
	15 : 30	~	18 : 30
場所	寒梅館ミーティングブース B		
議題	WS の位置づけ 具体的な企画内容の詰め (展示の有効性・体験以外の要素について)		
参加者	A, B, E, G (17:00~18:00 ごろ)		
記録			
【会議の流れ】			
1. WS の位置づけについての確認			
2. 企画内容の詰め			
①体験以外の要素について			
②展示の有効性 (必要かどうか)			
③プログラムの詰めと次回への課題			
【会議内容】			
1. WS の位置づけについて			
「児童と能楽師を、小学校と能楽師をつなぐ」という目的を達成するための方法がワークショップである。			
2 回目となる今度のワークショップの位置づけは、7 月のワークショップで足りなかった部分を補い、達成できた部分をより確実な成果として定着させるためのものである。			
7 月の WS では、「体験」に手ごたえを感じた。1 月の WS では、「体験」を軸に新たな要素を取り入れる事で、前回 WS の学びを定着させ、より深い学びが得られるのではないかと (11 月 10 日議事録参照)。			
2. 企画内容の詰め			
前回講義時の話し合いをより具体的にすすめるため、体験以外の要素の実施方法について話し合った。			
①体験以外の要素について			
体験以外の要素として、前回講義で挙がっていた意見は、			
〈観察のような鑑賞〉・・・座席・演じる場所を固定せず、近づいたり囲んだりして見ることが			
とができる			

というものだった。

今回の会議で、「観察のような鑑賞もいいが、能楽師の舞にどれほど緊張感があり、ひきつけられるものか、児童にも実際に感じてもらいたい」という意見が出た。

そこで、〈観察のような鑑賞〉と〈仕舞の鑑賞〉の両方を取り入れる方向で話し合った。出された意見についてまとめると、

(1) 観察のような鑑賞 (以下**観察**)

◎座席を固定せず、近づいたり囲んだり好きな方向から見る

(近づいて見ることで、児童自身が発見する機会を作る)

◎能楽師と児童が、互いに質問し、コミュニケーションをとる時間を設ける

(児童と能楽師が直接話す機会を作ることで、児童が能楽師を身近に感じるとともに、能楽師との交流の中で学ぶことができる)

◎体験と関連を持たせる

(観察での発見が体験時に生かせ、学びの定着につながる)

(2) 仕舞の鑑賞 (以下**鑑賞**)

◎実際の舞台を意識して、前方からのみ見せる

(能の持つ圧倒的な非日常感を肌で感じる)

◎7月のWS開会式のVTRが、実演になったようなイメージ

(VTRでは伝わらない緊張感を感じ、身近な能楽師の違う一面を見せる)

②展示の有効性

前回講義までに出された意見では、体験以外の要素に、鑑賞と展示があった。

今回の会議出席者は展示に消極的だったので、展示を必要としない理由を考えた。

〈装束展示を必要としない理由〉

- ・現時点で、「観察のような鑑賞」という深い企画がある
- ・モノよりヒトを見てほしい (能楽師とのふれあいを大切にしてほしい)
- ・衣桁^{いこう}にかけてあるだけの平面的な展示では効果が薄い
- ・WS会場がアリーナ (体育館) なので、展示だけ別の場所にすると移動が大変

〈仮設舞台を必要としない理由〉

- ・「非日常感の創出」を仮設舞台の効果に挙げていたが、面がなければ効果が薄い
(「非日常感」にこだわるなら、能楽師との交流がすでに非日常的)
- ・どのような仮設舞台を設置するのか
(同志社タイムのときのように柱を置くだけなら、舞台の狭さを実感するのは難しい)
- ・設営のリスクが大きい
(リスクの割に効果が見えにくい)

☆今回の会議では、「展示物より能楽師を近くで見てほしい」という意見で一致したため、展示は必要ないとの結論に至った。

③プログラムの詰めと次回への課題

会議の出席者でプログラムの内容を詰め、出席者の案として次回会議に諮ることになった。また、次回会議までになすべきことを話し合った。

○プログラムの詰めについては、現時点で出されている【体験】【観察】【鑑賞】の関連性と取り上げるべき題材について話し合った。以下がその決定事項である。

【体験】→WSの中心となるプログラムである

【観察】→体験と同じ演目を取り上げる

- ・児童にわかりやすいストーリーで有名な曲
- ・体験する事を考慮に入れて、単純な動き

【鑑賞】→仕舞を舞ってもらう

- ・「能楽師はすごい」と思ってもらうため、動きの激しいものを
- ・流儀の持ち味が出るものを
- ・能楽師（観世流・金剛流）それぞれの得意な曲を

ここまで話し合ってきて、「取り上げる演目は1つに絞るべきか？」という疑問が出てきた。

前回講義では、今まで見た能で印象に残った象徴表現を挙げていったときに、さまざまな演目からさまざまな表現が挙げられた。

「1つの演目で、おもしろい象徴表現が集中的に使用されているものは少ないのではないか。それなら、興味深い表現の部分をいくつかの演目から選んでくるほうがいいのでは？」という意見と、

「ストーリーを含めた深い内容を伝えるには、演目をできるかぎり絞ったほうが、わかりやすいのではないか」

という意見が出された。

ここで、

☆取り上げたい象徴表現を探すときには、演目を絞らずにリサーチする

（リサーチする時の視野を狭めないようにするため）

☆取り上げる象徴表現をリストアップした結果によって、

演目を

{	絞る（ストーリーのわかりやすさ・伝えやすさを視野に入れる）
	絞らない（ストーリーを伝えることを重視しない）

を決定することになった。

【次回講義までに】

- ・ **体験**で取り上げたい演目または象徴表現をリストアップしてくる
- ・ **体験**以外の要素として、**観察・鑑賞**のほかに取り上げたいものがあれば、効果とあわせて考えてくる
- ・ **鑑賞**で取り上げたい仕舞をリストアップしてくる